

女中は平気な顔でいました。しかし要吉はなんともいえなくやしい気がしました。

「もったいない話ですね。そんなにならないうちに、だれかめし上がる方はないんですか。」

「ああ、お許しがでないとおたしたちもいだけやしないからね。それに、」と女中は妙な顔をして笑いながらいました。「そんなに心配しなくたっていいわよ。こっちでかつてにくさらしたんだから、またいくらでもとってあげるわよ。お金さえ払やア、おまえさんの商売に損はないじやアないの。」

「それはそうですけれど……」

要吉は、なんとなくむかむかするといっしょに悲しい気もちになりました。店でくさらせるばかりでなく、こうして、おやしきの台所へきても、まだ、たべる人もなくくさらせる。大ぜいの人々の手をかけて、やつとのことでここまで運ばれてきたとうとい品物がだれにもたべてもらえずにくさって行く。ただ、ごみ箱へすてられるためにはかり運ばれてくるとして、それでいいものだろうか。しかし、一方には、くさりかけた一山いくらのものでさえも、十分にはたべられない人々が大ぜいいるのに。

「ああ、今夜もまた、あのやぶへ、くさりものをすてに行かなければならないのか。」

そう思うと、要吉はなんともいえなくやしいやな気もちになりました。商売というものが、どうしても、こういうことを見越してしなければならぬものだったら、なんといいやなことだろう。

しかし、要吉は、水菓子屋の店をとびだすわけには行きませんでした。要吉が徴兵検査まで勤めあげるといふ約束で、要吉の父は、水菓子屋の主人から何百円かのお金をかりたのです。

いくら考えても、要吉には、商売のためにはたべられるものをくさらせていいというりくつ、はわかりませんでした。

「大きくなったらわかるだろう。」要吉はそういつて自分をなぐさめるよりほかはありませんでした。

「それに年期があけたら、自分でひとつ店をだすんだ。そうすればけつして、品物をむぎむぎとくさらせるようなことはしやしない。くさりそうだったら、ただでも人にたべてもらう。」

要吉はそうも考えてみました。しかし、それは、要吉が大きくなってみなければ、できることだからどうかわかりません。

「……その上におやしきなどで、たべもせずすててしまうのは、いったいどうしたことだろう。」

これは、なおさら要吉ひとりきりでは解決できない問題でした。要吉は、女中の平気な顔を思いだすと、ただなんとなく、腹がたつたままりませんでした。

「みんな、もののねうちをしらないんだ。」

要吉はしばらくして、こうつぶやきました。しかしそれだけでは要吉の胸の中につかえている重くらしい塊は少しも軽くはなりませんでした。